

<資料>

2012年における流通科学大生の喫煙行動

Smoking Behavior of UMDS Students in 2012

中島 孝子*

Takako Nakashima

喫煙は多くの場合若年時に開始される習慣である。本論では、大学生の喫煙行動の実態調査を目的として流通科学大生を対象にアンケート調査を行った。喫煙経験率は全体で23.5%であり、大学生を対象とした他の調査結果に比べ高い場合と低い場合がある。家族に喫煙者がいる場合「父」がたばこを吸う割合が高い。家族に喫煙者がいないことと喫煙経験の有無は関連しない。最初の一本を吸った時期として「中学2年」の割合が高い。

キーワード：大学生、喫煙行動、喫煙経験率、最初の1本を吸った時期

I. はじめに

喫煙により喫煙者および周囲の者の健康が損なわれることは多くの研究によって明らかにされてきた。たばこに含まれるニコチンの依存性によって喫煙者が望んでも禁煙は難しいとされている。喫煙という「習慣」の多くは若年時に開始される。袁輪¹⁾らによれば、喫煙という習慣を始めるかどうかは主として20歳代前半までの若年者の問題である。

本論は流通科学大生を対象に実施されたアンケート調査の結果である。調査の目的は、喫煙経験の有無、最初の1本を吸った時期および現在の喫煙状況など、大学生の喫煙行動を調べることである。

以下に調査および分析結果を要約する。アンケートの回答者の平均年齢は19.1歳、回答者の家族に喫煙者がいる場合、「父」がたばこを吸う割合が38.5%で最も高かった。一方、家族は「誰も吸わない」と回答した者は46.0%である。喫煙経験者は全体で23.5%であり、これらの喫煙経験者が「最初の一本を吸った時期」は「中学2年」が最も多かった。これまでに吸った本数の合計が100本を超えているという意味で、喫煙経験者の約7割が、現在または過去において習慣的に喫煙している、またはしていた。喫煙経験者の現在の喫煙量は、「1日1~10本」が最も多く、次に「吸ったことがある程度で習慣ではない」および「1日11~20本」の喫煙量の者が多い。非喫煙者（喫煙未経験者および喫煙経験はあるが「吸ったことがある程度で習慣ではない」者）がた

*流通科学大学総合政策学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

ばこを吸わない理由として、「健康のため」「たばこが嫌い」の順に割合が高かった。喫煙者（非喫煙者以外）は55.6%が5年後も喫煙していると予想している一方、非喫煙者については、ほとんど全員が5年後も喫煙していないと予想していた。喫煙と健康に関する知識についてテスト形式の質問（6点満点）をしたところ、回答者全体の平均は3.7点であった。非喫煙者に比較して、喫煙者のほうが平均点は低かった（喫煙者3.5点、非喫煙者3.8点）。

いくつかの項目を取り出して分析および考察をおこなった結果は以下のとおりである：(1) 本調査における喫煙経験率は、2009年、2010年、2011年における本学での調査結果^{2) 3) 4)}（以下、2009年調査、2010年調査、2011年調査とする）より低い。また、大学生を対象とした複数の調査結果より高い場合と低い場合がある。(2) たばこを吸う家族がいるかどうかと、喫煙経験の有無とは統計的に有意な関連はみられなかった。(3) 最初の一本を吸った時期として最も多いのは「中学2年」である。次に「小学生」、「中学1年」、「高校以降」が同程度に多い。(4) 喫煙経験者の現在の喫煙量と、最初の1本を吸った時期には統計的に有意な関連はみられなかった。また、日常的な喫煙者は、「中学校」（53.3%）および「高校」（23.3%）で最初の一本を吸っている者が多い。一方、日常的でない喫煙者は「中学校」（47.1%）および「小学校」（23.5%）に最初の一本を吸っている者が多い。(5) 喫煙と健康に関する知識に関連して、喫煙者と非喫煙者を比較すると、得点およびマークした病気の数の分布はそれぞれ異なる。(6) 喫煙者において、禁煙希望ありと禁煙希望なしはほぼ同数であった。(7) 現在の喫煙量が多い者ほど、これまでの喫煙本数の合計が100本を超えている者が多い。(8) 2010年秋のたばこ税増税に伴うたばこ価格値上げの事実について、多くの回答者が知っていると答えた（90.5%）。(9) 仮想的なたばこ価格における喫煙量を尋ねたところ、回答者全体および喫煙者ともに、価格が上がるにつれて「毎日吸う」者の割合が減少し「吸わない」と回答する者の割合が増加する。ただし、喫煙者について現在の喫煙量と1箱200円の場合の喫煙量を比較すると、両者の違いは単純ではない。

以下では、II節でアンケート結果の概略を、III節で分析および考察を、IV節でまとめを述べる。

II. アンケート結果

アンケートは、大学1、2年生を主な対象とする講義の受講者に対して、講義の初日（2012年4月）に匿名でおこなった。質問は全部で16問あり、一部、喫煙経験ありの者と喫煙経験なしの者との質問が異なる。アンケートの回答用紙を返却した人数は321人、うち200人分を有効回答としてデータの集計対象とした⁵⁾。

有効データ数200の内訳は、男性157人（78.5%）、女性43人（21.5%）である。回答者の平均年齢は19.1歳で、2011年調査（20.1歳）よりもおよそ1歳低い。回答者の年齢の内訳をみると、18歳（46.0%）、19歳（22.5%）、20歳（14.0%）の順に多い。

家族の喫煙状況について複数回答で質問した結果を表1にまとめた。家族の中では「父」が吸

うと答えた者が最も多い。「父」が吸っている者の割合は、2011 年調査では 5 割だったものが 4 割弱に減少している。以下「兄」、「祖父」、「母」の順となる。家族は「誰も吸わない」と回答した者は全体の 46.0%で、2011 年調査の 35.5%よりも増加した。

喫煙経験者は全体の 23.5%で、男女の内訳は表 2 のとおりである。喫煙経験者とは、アンケート調査日までに 1 回でもたばこを吸ったことがある者である。回答者全体、男性および女性のいずれについても喫煙経験率は 2011 年調査よりも減少した。

喫煙経験者 47 名に対して、「最初の 1 本を吸った時期」について質問した。図 1 を見ると、2011 年調査と同様、小学校や中学校など比較的 low 年齢の時期に最初の 1 本を吸っている者が存在する。ただし、その割合は 2011 年調査と比較して「中学 1 年」および「中学 2 年」で増加し、「高校 1 年」「高校 3 年」および「高校以降」で減少している。最初の 1 本を吸った時期として本調査でも割合が高いのは、「中学 2 年」である。「中学 3 年」「高校 1 年」でいったん割合が低くなった後、年齢が上がるにつれて最初の 1 本を吸った者の割合が増加する傾向がみられる。

喫煙経験者に対して、これまで吸った本数をあわせると 100 本を超えるかどうかをたずねた。この質問は喫煙が習慣となっているかどうかの目安の一つとなる。これまで吸った本数が 100 本を超えている場合、現在または過去に喫煙が習慣となっている（いた）者といえる。表 3 をみると喫煙経験者の 7 割が「100 本を超える」と答えた。この割合は 2011 年調査と比べると、増加している。

表 1. たばこを吸う家族（複数回答）

	人数 (2012)	割合 (2012, %)	割合 (2011, %)
父	77	38.5	50.0
兄	24	12.0	16.1
祖父	21	10.5	6.5
母	20	10.0	6.5
姉	6	3.0	1.6
妹	4	2.0	0.0
祖母	3	1.5	4.8
弟	3	1.5	1.6
その他	4	2.0	4.8
誰も吸わない	92	46.0	35.5

表 2. 喫煙経験者の人数と割合

	人数 (2012)	割合 (2012, %)	割合 (2011, %)
全体	47	23.5	46.8
男性	43	27.4	49.0
女性	4	9.3	36.4

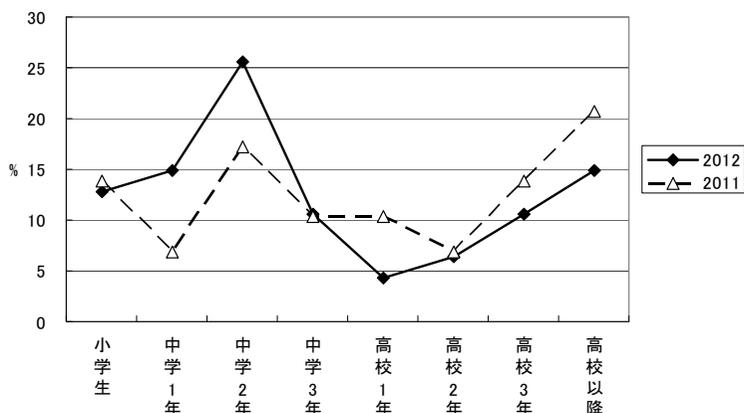


図 1. 最初の 1 本を吸った時期

同時に喫煙経験者に対して現在の喫煙量を尋ねた（表 4）。最も多いのは、喫煙量が「1 日 1～10 本」である（36.2%）。次に「吸ったことがある程度で習慣ではない」（23.4%）および「1 日 11～20 本」（21.3%）という回答が多かった。毎日吸っている者は平均的に 2 日に 1 箱程度消費しており、さらに毎日吸っている者の喫煙経験者に占める割合は 6 割を超える。喫煙量に関する傾向は 2011 年調査と比較してほとんど変化はみられないが、毎日喫煙している者（カテゴリー 1～3）

表 3. これまで吸った本数の合計（喫煙経験者）

	人数 (2012)	割合 (2012, %)	割合 (2011, %)
100 本を超える	33	70.2	62.1
100 本を超えない	14	29.8	37.9
合計	47	100.0	100.0

表 4. 現在の喫煙量（喫煙経験者）

喫煙量	人数 (2012)	割合 (2012, %)	割合 (2011, %)
1 1 日 21 本以上	3	6.4	0.0
2 1 日 11～20 本	10	21.3	31.0
3 1 日 1～10 本	17	36.2	27.6
4 週に数本程度	0	0.0	6.9
5 月に数本程度	0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、 気が向いたときだけ	6	12.8	13.8
7 吸ったことがある程度で 習慣ではない	11	23.4	20.7
合計	47	100.0	100.0

の割合が増加している。また、2011年調査よりも、「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」(カテゴリ6)の割合が減少し、「吸ったことがある程度で習慣ではない」(カテゴリ7)の割合が増加している。

表 5. 喫煙をしない理由 (複数回答)

喫煙をしない理由 (複数回答)	人数 (2012)	割合 (2012, %)	割合 (2011, %)
健康のため	121	73.8	82.1
タバコが嫌い (におい、味)	106	64.6	59.0
タバコの値段が高い・お金がもったいない	82	50.0	76.9
人の迷惑を考えて	53	32.3	41.0
機会がなかったから	29	17.7	30.8
その他	32	19.5	12.8

ここで、回答者を喫煙経験および喫煙量に応じて2タイプに分ける。1つ目は、喫煙量のカテゴリ1~6に含まれる者である。これを「喫煙者」と定義する。2つ目は、喫煙量のカテゴリ7に含まれる者および喫煙未経験者である。これを「非喫煙者」と定義する。

非喫煙者 (合計 164 人) に対して、たばこを吸わない理由を複数回答で尋ねた。結果は表5のとおりである。最も多いのが「健康のため」、次に多いのが「たばこが嫌い」という回答であった。

回答者全員に対して2つの質問をした。1つは、「5年後にたばこを吸っているかどうか」、2つめは喫煙と健康に関する知識についての質問である。

表6より、喫煙者は、55.6%が5年後もたばこを吸っていると予想しているのに対し、非喫煙者は、ほぼ全員 (98.8%) が5年後もたばこを吸っていないだろうと予想している。2011年調査と比較すると、5年後も吸っていると予想している喫煙者が約5%減少している。一方で、5年後に喫煙していると予想する非喫煙者がわずかながら存在するようになった。

表 6. 5年後の予想

	喫煙者			非喫煙者		
	人数 (2012)	割合 (2012, %)	割合 (2011, %)	人数 (2012)	割合 (2012, %)	割合 (2011, %)
5年後にたばこを吸っている	20	55.6	60.9	2	1.2	0.0
5年後にたばこを吸っていない	16	44.4	39.1	162	98.8	100.0
合計	36	100.0	100.0	164	100.0	100.0

喫煙と健康に関する知識として、脳卒中、肺がん、食道がん、胃がん、心筋梗塞、膀胱がんの6種類の疾病を挙げ、その中で喫煙者の死亡確率が非喫煙者の10倍以上であるものを選ばせた。

6つの疾病のうち死亡確率に10倍の差があるのは肺がんと食道がんである⁶⁾。正しい選択肢を選べば1点を与え、同時に正しくない選択肢を選ばなかった場合も1点を与えて、最高得点を6点とした。全体で平均は3.7点である。得点分布は4点をピークとする分布となっている(表7)。2011年調査と比較すると、ピークが右に寄った分布となっている。

表7. 喫煙と健康に関する知識の得点分布

得点	人数(2012)	割合(2012, %)	割合(2011, %)
1	0	0.0	0.0
2	36	18.0	25.8
3	46	23.0	29.0
4	59	29.5	24.2
5	51	25.5	16.1
6	8	4.0	4.8
合計	200	100.0	100

表8. たばこ価格が変化した場合の喫煙量(全員)

喫煙量	人数				割合(%)			
	たばこ1箱(20本)の価格				たばこ1箱(20本)の価格			
	600円	800円	1000円		200円	600円	800円	1000円
1 1日21本以上	7	2	2	2	3.5	1.0	1.0	1.0
2 1日11本~20本	14	6	2	2	7.0	3.0	1.0	1.0
3 1日1~10本	7	9	10	6	3.5	4.5	5.0	3.0
4 週に数本程度	0	3	2	3	0.0	1.5	1.0	1.5
5 月に数本程度	0	0	2	0	0.0	0.0	1.0	0.0
6 毎日必ずではなく、 気が向いたときだけ	8	9	8	6	4.0	4.5	4.0	3.0
7 吸わない	164	171	174	181	82.0	85.5	87.0	90.5
合計	200	200	200	200	100.0	100.0	100.0	100.0

2010年10月、たばこ消費税が増税された⁷⁾。増税に伴い、たばこ価格は値上げされ、銘柄にもよるがたばこ1箱あたり(20本入り)で300円前後だったものが、およそ400円前後となった^{8) 9) 10)}。この事実について知っているかどうか尋ねたところ、200人の有効回答者のうち、「知っている」が181人、「知らない」が19人であり、ほとんどがたばこ価格の値上げについて知っていた(90.5%)。

最後に、仮想的な質問として、たばこ1箱(20本入り)の価格が200円、600円、800円、1000円になった場合における喫煙量を回答者全員に尋ねた(表8)。たばこ価格が低い場合(1箱200円)に比較して、600円、800円、1000円と価格が上がっていくにつれて、「吸わない」(カテゴ

リー7)と答える者が増加する。また、「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」(カテゴリー6)という回答は、200円の場合に比較して600円でいったん増加するが、800円になると減少し、1000円で再び増加する。さらに「毎日吸う」(カテゴリー1~3)回答者の割合の合計は価格の上昇にしたがい減少する。ただし、「1日21本以上」および「1日11本~20本」(カテゴリー1、2)については価格の上昇に伴って回答者の割合は減少または横ばいとなるのに対し、「1日1~10本」(カテゴリー3)については800円まで増加した後、1000円で減少する。上記の結果は、たばこ価格が仮に1箱(20本)あたり1000円まで上昇しても喫煙者はゼロにはならないが、価格の上昇が喫煙者の喫煙量を減少させる可能性があることを意味していると考えられる。

Ⅲ. 分析および考察

1. 喫煙経験と家族の喫煙状況

家族の喫煙状況を喫煙経験の有無別にみると、家族のうち「誰も吸わない」と答えた者の割合は喫煙未経験者のほうが高い。つまり、家族の喫煙状況について、喫煙経験の有無と関連があると考えられるのは、「誰も吸わない」という項目である。そこで、家族の喫煙状況について「誰かが吸う」か「誰も吸わない」かに注目し、表1と表2から表9(クロス集計表)を作成した。

家族が「誰も吸わない」ほど喫煙経験がないと予想される。帰無仮説を「喫煙経験と家族に喫煙者がいるかどうかとは関連がない」として、独立性の検定をおこなった。その結果、帰無仮説は棄却されず、喫煙経験の有無と家族に喫煙者がいるかどうかは関連しているといえない(有意水準0.05)。

表9. 喫煙経験別のたばこを吸う家族

	喫煙経験あり(人)	喫煙経験なし(人)	喫煙経験あり(%)	喫煙経験なし(%)
家族の誰かが吸う	30	78	63.8	51.0
家族は誰も吸わない	17	75	36.2	49.0
合計	47	153	100	100

2. 喫煙経験者における最初の1本を吸った時期と現在の喫煙量

ここでは、喫煙経験者を喫煙量に応じて2タイプに分ける。1つ目は、喫煙量のカテゴリー1~3に含まれ、毎日喫煙している喫煙経験者である。これを「日常的な喫煙者」と定義する。2つ目は、喫煙量のカテゴリー4~7に含まれ、たまに喫煙をする、または現在は喫煙をしない喫煙経験者である。これを「日常的でない喫煙者」と定義する。さらに、最初の1本を吸った時期を「小学校」「中学校」「高校」「高校以降」の4つに集約する。

日常的な喫煙者および日常的でない喫煙者それぞれについて、最初の1本を吸った時期を集計

すると表 10 のようになる。2つのタイプの喫煙経験者を比較すると、両者とも「中学校」で初めて吸ったことがある者が多い。ただし、「小学校」で初めて吸った者の割合は日常的でない喫煙者のほうが高い。本調査では、「小学校」を除いて、日常的な喫煙者と日常的でない喫煙者との間に相似的な分布が観察される。一方、2011年調査と比較すると、日常的な喫煙者では「中学校」および「高校以降」で初めて吸った者が増加し、「小学校」と「高校」で初めて吸った者が減少した。日常的でない喫煙者では、「小学校」と「中学校」で増加、「高校以降」で減少した。

現在の喫煙量と最初の一本を吸った時期の関係について、独立性の検定を行ったところ「現在の喫煙量と最初の1本を吸った時期に関連あるとはいえない」という結論を得た(有意水準 0.05)。これは 2011年調査における同様の検定結果と同じである。

表 10. 最初の1本を吸った時期

最初の一本を吸った時期	2012				2011	
	日常的な喫煙者(人)	日常的でない喫煙者(人)	日常的な喫煙者(%)	日常的でない喫煙者(%)	日常的な喫煙者(%)	日常的でない喫煙者(%)
小学校	2	4	6.7	23.5	16.7	11.8
中学校	16	8	53.3	47.1	25.0	41.2
高校	7	3	23.3	17.6	50.0	17.6
高校以降	5	2	16.7	11.8	8.3	29.4
合計	30	17	100	100	100	100

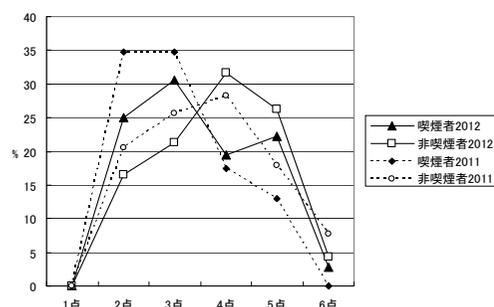


図 2. 知識に関する得点分布(2012 および 2011)

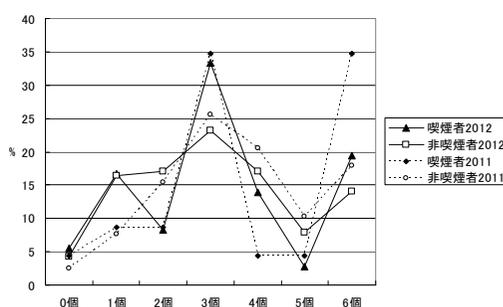


図 3. マークした病気の数(2012 および 2011)

3. 知識

喫煙者と非喫煙者について、喫煙と健康の知識に関する質問に関する得点分布を図示すると図 2 のようになる。喫煙者の得点分布は 3 点と 5 点をピークとする 2 峰型の分布であるのに対し、非喫煙者の得点分布は 4 点をピークとする単峰型分布を示している。また両者の得点の平均点はそれぞれ 3.5 点と 3.8 点である。得点分布は、喫煙者については 2011 年調査とは異なり単峰型から 2 峰型に変化しており、また、2012 年のほうがピークにおける高さが低くなっている。非喫煙

者についてはピークが4点である点は同じであるが、2011年に比較して分布がより右寄りとなっている。

一方、マークした病気の数を比較したところ、図3のような分布となった。マークした病気の数が多いほど、その回答者はより多くの病気が喫煙と関連すると考えていることが推測できる。本調査における喫煙者は、3個にマークした者の割合が最も高く、平均は3.2個である。非喫煙者も、マークした数が3個をピークとする分布となっており、平均は3.1個である。図3において本調査と2011年調査の分布を比較すると、2012年において喫煙者がマークした病気の個数の分布は、2011年調査の2峰型から3峰型に変化していることが観察される。非喫煙者の場合には2011年調査と比較してマーク数が少ない者（1個および2個）の割合が増加し、マーク数の多い者（4～6個）の割合が減少している。

表 11. 喫煙経験者の喫煙量と禁煙希望

喫煙量	禁煙希望あり			禁煙希望なし		
	人数 (2012, 人)	割合 (2012, %)	割合 (2011, %)	人数 (2012, 人)	割合 (2012, %)	割合 (2011, %)
1 1日21本以上	1	5.3	0.0	2	11.8	0.0
2 1日11～20本	7	36.8	37.5	3	17.6	42.9
3 1日1～10本	10	52.6	37.5	7	41.2	28.6
4 週に数本程度	0	0.0	6.3	0	0.0	14.3
5 月に数本程度	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、 気が向いたときだけ	1	5.3	18.8	5	29.4	14.3
合計	19	100	100	17	100	100

表 12. これまでの喫煙量が100本を超える者と超えない者の現在の喫煙量

喫煙量	これまでの喫煙量が 100本を超える			これまでの喫煙量が 100本を超えない		
	人数 (2012)	割合 (2012, %)	割合 (2011, %)	人数 (2012)	割合 (2012, %)	割合 (2011, %)
1 1日21本以上	3	9.1	0.0	0	0.0	0.0
2 1日11本～20本	10	30.3	50.0	0	0.0	0.0
3 1日1～10本	16	48.5	44.4	1	7.1	0.0
4 週に数本程度	0	0.0	0.0	0	0.0	18.2
5 月に数本程度	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、 気が向いたときだけ	4	12.1	5.6	2	14.3	27.3
7 吸ったことがある程度で 習慣ではない	0	0.0	0.0	11	78.6	54.3
合計	33	100	100	14	100	100

4. 喫煙者の喫煙量と禁煙希望の有無

喫煙者に対して、禁煙希望の有無を尋ねたところ、36人中19人が禁煙を希望し、17人は希望しないと答えた(表11)。全体としては禁煙を希望する者と希望しない者の人数は同程度である。2011年調査に比較して、日常的な喫煙者における禁煙希望ありの割合が増加している。

5. 喫煙経験者：これまでの喫煙量が100本を超える者と超えない者の喫煙量

これまでの喫煙量が100本を超えているかどうかは、過去または現在における喫煙習慣の有無を判断する指標となる。表12を見ると、これまでの喫煙量が100本を超える者については、「1日21本以上」吸っている者、「1日11～20本」吸っている者および「1日1～10本」吸っている者(カテゴリー1～3)が多く、合計で9割近い。これらの者は現在においても喫煙が習慣となっていると考えられる。しかし、これまでの喫煙量が100本を超えていながら「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」と答えた者(カテゴリー6)については、かつては喫煙が習慣となっていたが、現在は喫煙をたまにしかしないと解釈できる。本調査と2011年調査とを比較すると、これまでの喫煙量が100本を超える者については、おおよそ分布の傾向が似ている。しかし、これまでの喫煙量が100本を超えない者については変化が観察される。本調査では「1日1～10本以上」吸っている者(カテゴリー3)がゼロでなくなり、「吸ったことがある程度で習慣ではない」者(カテゴリー7)が増加する一方、「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」(カテゴリー6)の者が減少している。カテゴリー3の者については、アンケート調査実施日のほんの少し前に喫煙量が「1日1～10本以上」になったばかりとみなすことができる。

表13. たばこ価格が変化した場合の喫煙量(喫煙経験者)

喫煙量	人数				割合(%)				現在の喫煙量(再掲)
	たばこ1箱(20本)の価格				たばこ1箱(20本)の価格				
	200円	600円	800円	1000円	200円	600円	800円	1000円	
1 1日21本以上	7	2	2	2	14.9	4.3	4.3	4.3	6.4
2 1日11本～20本	13	6	1	1	27.7	12.8	2.1	2.1	21.3
3 1日1～10本	7	8	10	6	14.9	17.0	21.3	12.8	36.2
4 週に数本程度	0	3	2	3	0.0	6.4	4.3	6.4	0.0
5 月に数本程度	0	0	2	0	0.0	0.0	4.3	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、 気が向いたときだけ	7	9	8	6	14.9	19.1	17.0	12.8	12.8
7 吸わない	13	19	22	29	27.7	40.4	46.8	61.7	23.4
合計	47	47	47	47	100	100	100	100	100

表 14. 喫煙経験率の比較

調査の種類	調査の時期	データの属性	男性	女性
本調査	2012年4月	大学生(平均年齢19.1歳)	27.4%	9.3%
中島(2012)	2011年4月	大学生(平均年齢20.1歳)	49.0%	36.4%
中島(2011)	2010年4月	大学生(平均年齢19.1歳)	33.8%	13.6%
中島(2010)	2009年4月	大学生(平均年齢19.3歳)	35.2%	17.9%
中尾他(2007)	2002年4~7月	大学生(平均年齢19.2歳)	31.9%	6.3%
新井他(2009)	2007年11~12月	大学生(1~4年生)	17.2%	1.9%
石川・高橋(2011)	2010年6~9月	大学生1年生	26%	11%
石川・高橋(2011)	2010年6~9月	大学生2年生	37%	13%
石川・高橋(2011)	2010年6~9月	大学生3年生	39%	14%

6. 仮想的なたばこ価格の変化と喫煙経験者の喫煙量

たばこ価格が変化したとする場合の喫煙量を喫煙経験者について集計した(表13)。回答者全体の場合と同様に、喫煙経験者についてもたばこ価格の上昇に従って「吸わない」(カテゴリー7)という回答が増加する。また、「1日21本以上」および「1日11本~20本」(カテゴリー1、2)については価格の上昇に伴って回答者の割合は減少または横ばいとなるのに対し、「1日1~10本」(カテゴリー3)については800円まで増加した後、1000円で減少する。

現在の喫煙量と比較したとき、価格が上昇した場合は喫煙量の多いカテゴリー(カテゴリー1~3)の割合が減少し、「吸わない」(カテゴリー7)の回答が増加する。しかし、価格が200円に下落した場合についてはそれほど単純ではない。現在の喫煙量と比較して、価格200円では「1日21本以上」と「1日1~10本」喫煙する者(カテゴリー1および2)の割合が増加するが、「1日11~20本」(カテゴリー3)の割合は減少する。結果として「毎日吸う」(カテゴリー1~3)者の割合の合計は、価格200円においてむしろ減少する。一方、価格の下落によって「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」喫煙する者と「吸わない」者(カテゴリー6および7)が増加する。

7. 喫煙経験率の比較

本調査における喫煙経験率を男女別にみると男性27.4%、女性9.3%である。本調査における喫煙経験率は2009年調査、2010年調査および2011年調査における喫煙経験率と比較すると、男女ともに低い(表14)。すなわち、2011年をのぞき、2009年以降喫煙経験率は低下傾向にある。また、2011年調査は他の調査年と比較して喫煙経験率が高い。2011年調査と他の調査年との違いの一つは平均年齢であり、2011年調査のほうが1歳高い。このことから、本大学では大学入学後に新たに喫煙習慣を身につける者が少なくないと考えられる。大学に入学すると高校までに比較して校則などによるしびりが緩やかになり、さらに成人すると喫煙に関する法的な制限もなくなる。学生が大学入学後に1本目を吸うことを防ぐと共に、禁煙希望者への何らかの支援が必要であると考え

られる。

本調査における喫煙経験率を、大学生を対象とする他の調査と比較する。中尾他¹¹⁾による大学生を対象とする最近の調査では、喫煙経験率は男性31.9%、女性6.3%である。また、新井他¹²⁾の調査では、喫煙経験率はさらに低く、男性17.2%、女性1.9%である。一方、石川・高橋¹³⁾の大学生を対象とする調査では、学年が上がるごとに喫煙経験率が上昇している。本調査における喫煙経験率は、新井他¹²⁾の調査結果よりも男女とも高いが、中尾他¹¹⁾、石川・高橋¹³⁾が大学生を対象として行った喫煙経験率に比較すると同程度であるといえる。

IV. おわりに

本論では流通科学大生を対象に実施したアンケート調査の結果を述べている。調査の目的は、喫煙経験の有無、最初の1本を吸った時期および現在の喫煙状況など、大学生の喫煙行動を調べることである。

結果は、以下のとおりである：(1) 喫煙経験率は全体で23.5%であった。この割合は、本学における2009年調査、2010年調査、および2011年調査よりも低い。他大学の学生を対象とした複数の調査結果に比較すると高い場合と低い場合がある。(2) 回答者の家族に喫煙者がいる場合、「父」がたばこを吸う割合(38.5%)が最も高い。2011年調査と異なり、「父」がたばこを吸う割合は、家族が「誰も吸わない」割合(46.0%)より低い。また、たばこを吸う家族がいないことと、喫煙経験の有無とは統計的に有意な関連がみられなかった(有意水準0.05)。(3) 最初の1本を吸った時期として最も多いのは「中学2年」である。次に「小学生」、「中学1年」、「高校以降」が同程度に多い。(4) 喫煙経験者の現在の喫煙量と、最初の1本を吸った時期には統計的に有意な関連はみられなかった(有意水準0.05)。また、日常的な喫煙者は、「中学校」(53.3%)および「高校」(23.3%)で最初の1本を吸っている一方で、日常的でない喫煙者は「中学校」(47.1%)および「小学校」(23.5%)に最初の1本を吸っている者が多い。(5) 喫煙と健康に関する知識に関連して、喫煙者と非喫煙者を比較すると、得点およびマークした病気の数の分布は異なる。喫煙者の得点分布は3、5点をピークとする2峰型の分布であるのに対し、非喫煙者は4点をピークとする単峰型の得点分布を見せている。一方、喫煙者はマークした病気の数が1、3、6個をピークとする分布となっているが、非喫煙者は3、6個をピークとする分布を示した。(6) 喫煙者において、禁煙希望ありと禁煙希望なしはほぼ同数であった。(7) 現在の喫煙量が多い者ほど、これまでの喫煙本数の合計が100本を超えている者が多い。この傾向は2011年調査と同様である。しかし、喫煙本数の合計が100本を超えない者については、2011年調査と比較して「吸ったことがある程度で習慣ではない」者の割合が増加し、「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」の者の割合が減少した。(8) 2010年秋のたばこ税増税に伴うたばこ価格値上げの事実について、約9割の回答者が知っていると答えた(90.5%)。(9) 回答者全員に、仮想的なたばこ価格における喫煙

量を尋ねたところ、価格が上がるにつれて「毎日吸う」者の割合が減少し、「吸わない」者の割合が減少する。ただし、喫煙者については、現在の喫煙量と価格が低い場合（1箱200円）の喫煙量を比較すると、両者の違いは単純ではない。

喫煙という習慣を始めるかどうかは主として20歳代前半までの若年者の問題である。実際、本調査では、2011年調査に比較して喫煙経験率が下落した。両者の違いの一つは平均年齢にある。2011年調査では2年生以上が調査対象の中心であったのに対し、本調査では入学間もない1年生が主な調査対象となっている。この結果は、多くの文献¹⁴⁾において指摘されているように、大学入学以降の喫煙開始の抑止が問題の一つであることを示唆している。さらに、禁煙希望者への情報提供などの禁煙支援を大学という教育機関において実施する必要がある。ただし、本調査と同様の年齢層を対象とした2009年調査および2010年調査に比較すると本調査の喫煙経験率は低く、本学において大学1、2年生の喫煙経験率は低下傾向にある。

仮想的な価格と喫煙量の関係を見ると、たばこ価格の値上げは、限界はあるものの、若年者の喫煙行動を変化させるのに効果があると考えられる。すなわち、若年者の喫煙開始を防止し、喫煙者の喫煙量を抑制することを目的にたばこ価格のさらなる値上げ（増税）の実施が検討されるべきである。

謝辞

アンケートに協力していただいた学生のみなさん、および匿名の確認者のコメントに感謝いたします。もちろん、残る誤りは著者のものです。

引用文献、注

- 1) 箕輪眞澄・尾崎米厚：「若年における喫煙開始がもたらす悪影響」『保健医療科学』54, No. 4 (2005), pp. 262-277.
- 2) 中島孝子：「2009年における流通科学大生の喫煙行動」『流通科学大学論集－経済・経営情報編』18, No. 2 (2010), pp. 157-168.
- 3) 中島孝子：「2010年における流通科学大生の喫煙行動」『流通科学大学論集－経済・経営情報編』19, No. 2 (2011), pp. 121-133.
- 4) 中島孝子：「2011年における流通科学大生の喫煙行動」『流通科学大学論集－経済・経営情報編』20, No. 2 (2012), pp. 153-167.
- 5) 喫煙経験者であるのに、喫煙経験のない者を対象とする質問に回答があるなどのデータを無効とした。
- 6) 井伊雅子・大日康史：『医療サービス需要の経済分析』（日本経済新聞社, 2002）。
- 7) 財務省「たばこ税等の税率及び税収」（URL: http://www.mof.go.jp/tax_policy/summary/consumption/127.htm, 2010年8月20日取得）。
- 8) All About ニュース「たばこ税増税1箱あたり100円以上の値上げへ」（2010年9月8日）（URL: <http://focus.allabout.co.jp/gm/gc/290785/?from=dailynews.yahoo.co.jp>, 2010年8月20日取得）

- 9) 財務省「日本たばこ産業株式会社製紙巻たばこ等の小売定価変更の認可をしました」
(URL: http://www.mof.go.jp/tab_salt/topics/20100716_press.htm, 2010年8月20日取得)
- 10) 財務省「フィリップ・モリス社及びブリティッシュ・アメリカン・タバコ社製品の小売定価変更の認可をしました」(URL: http://www.mof.go.jp/tab_salt/topics/20100806_press.htm, 2010年8月20日取得)
- 11) 中尾理恵子・田原靖昭・石井伸子・門司和彦：「未成年期に喫煙開始した若者の喫煙に関する認識とニコチン依存度 —大学生の質問紙調査から—」『保健学研究』20, No. 1 (2007), pp. 59-65.
- 12) 新井信成・上地勝・富樫泰一：「本学学生における喫煙行動および知識・態度に関する調査研究」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』58 (2009), pp. 423-438.
- 13) 石川達也・高橋薫：「大学生の健康観：喫煙およびムンプスに対する認識：日本福祉大学2010年アンケート調査からの検討」『日本福祉大学社会福祉論集』（124）, 27-37, 2011-03-31
- 14) たとえば中尾他（2007）.
- 15) 中井久美子・高橋裕子・清原康介・苗村郁郎・立身政信・寺尾英夫・吉原正治・杉田義郎・森山敏樹・鎌野寛・盛岡洋史・池谷直樹・辻井啓之・山形然太郎：「全国国立大学法人における喫煙対策調査（2006年度調査）」『禁煙科学』2, No. 4 (2008), pp. 9-14.
- 16) 中井久美子・高橋裕子・清原康介：「大学禁煙化プロジェクトにおける喫煙大学生への禁煙支援介入の成果」『禁煙科学』2, No. 4 (2008), pp. 22-28.